



7月6日 Mr. David Allen (ニュージーランド大使館第一次産業参事官) による講演会



ニュージーランド大使館の Mr. David Allen にお越しいただき、ニュージーランドにおける持続可能な開発目標についてご講義いただきました。地球環境の保全に関して世界では、1992年の地球サミット以降、直近ではSDGsまで様々な会議が開かれ、国際協力が求められている。こうした状況の中で、誰が更なる持続可能な世界を創り出していくのか、というのは誰もが気になるテーマである。David氏は「答えは簡単、あなた自身だ。」とおっしゃった。そして次のように言葉を続けた。「しかしここで大きな課題

がある。私が YOU! とあなたを指さすと、人差し指はあなたの方を向いているが、中指、薬指、小指の三本ともその反対の方向を向いている。あなたが進んでいく方向と異なる向きに動く人は必ずいる。しかし、一滴のしずくも海を作ることが出来るのだ。自分とは違った意見を持つ人、あるいは意見を持たない人にもあなたの言葉で語りかけることをやめないでほしい」。とても印象的なメッセージだった。

ニュージーランドではゼロ・カーボンを目標に農業での温室効果ガス排出に着目して、研究が盛んに行われている。例えば、牛や羊は温室効果ガスの一つであるメタンを排出するので、その排出量を減らすために牛たちに草ではなく海藻などから作られた餌を食べさせる、というものである。また、David氏の娘さんは、肉を食べ続けることは持続不可能だと言って、ベジタリアンになったそうだ。これが日常生活で意識するということなのかと感心した。個人、経済、地域社会、環境を考慮しながら、道具、技術、知識、そして教育を活用することが重要だ。日本とニュージーランドは島国という点では共通しているが、気候や辿ってきた歴史が異なる。だからこそ、それぞれの国が自国にあった目標を、お互いを参考にし、お互いに意見交換をしながら定める必要があると考えた。

今回のレクチャーではこのような言葉が紹介された。”There is no planet B.” 地球の次の星はないのだと。しかし私たちのゴールは明瞭にはなっていない。我々が向かう先は、未来を担う私たち世代にかかっていると感じた。

【参加した生徒の感想】

・David氏は環境問題など世界規模の課題の解決のためには“What you do individually”が大切だとおっしゃった。これが私の心に深く刻まれている。世界規模の課題の解決は並大抵の努力で成し遂げることはできず、思いつく対策も机上の空論で終わってしまうことが多い。一つ一つ小さなことからでも対策を進めていくことが解決につながるというメッセージは、現在10月のプレゼンに向けて解決策を考えている私たちにとって、勇気を与えてくれるものだった。

・今回の講演で最も印象に残ったのは“there is no planet B”というDavid氏の言葉だ。この地球上にある自然は一度破壊されてしまったら元には戻らないということだ。正直この項講演を聞く前までは、一度自然破壊を破壊しても、最近は様々な技術が発展しているし、元の状態に戻すことは可能だろうという甘い考えを持っていた。だが、環境問題は複雑に絡み合っているものであり、そう簡単に考えられるものではないと痛感した。一度自然環境を壊してしまったら手遅れなのだ。自分の行動で自然を破壊

してしまわないよう責任を持って行動していきたい。

・David氏が講演中、環境問題は私たち自身の問題なのだ、私たち自身が考え、解決していくべきなのだという考えを強調しているところが印象に残った。例えば、自分の周りの人や自分が行っている環境のための活動を述べたり、私たち自身にも何の活動をしているか問いたりする場面が多く、自分の中で無意識に考えている「環境問題は日常生活とは別物だ」という意識を刺激されたようであった。だからと言って、今日からすぐに環境と自分自身を関連付けることは困難であると思うので、まずは少しずつ、自分から環境の書籍や話題に触れるようにしてみたい。そうすれば、次第に環境について「考え」たり「行動し」たりすることができるようになるのではないかな。

・持続可能性という概念の重要性を人々にどのように伝えていくべきか質問したときに、David氏がkeep talkingとおっしゃっていたのが印象的だった。講演の中で「何か環境に配慮した取り組みを家や学校で行っているか」と問いかけられたとき、私は何も思いつかず、自分が日々の生活の中であまり環境問題を意識していないことを実感した。環境問題は、自分たちの日々の生活に直接的な影響が少ないことから、どうしても自分ごととして捉えづらい。しかし、一人一人の意識の変革なし



に、この問題の解決はない。やはり「伝え続ける」ことで少しずつ人々の意識は変わっていくのだと思う。まさにDavid氏はこの講演を通じて私たちに対して持続可能な社会を実現させる重要性を伝えてくださったので、私はこの講演を持続可能性について真剣に考えるきっかけとし、これから日々の生活で環境問題の解決のためにできることを確実にやりたいと思う。

・“There is no planet B”というフレーズが今回の講演の中で特に印象に残っている。普段何かをするときに、失敗した時に、どうするか、二つ目の手段を考えてからでないと行動に移すことができない私にとって、地球規模の問題を考えることの難しさ・大変さを、改めて感じさせる機会になった。できる対策を今打っておいて、その影響を見て別の手段を取ることは、今の技術をもってすれば簡単にできるだろうと思っていたが、この言葉を聞いて、今の私たちの行動や決断がいかに重要であるのかを痛感した。そのうえで、これからの自分の行動をどのようにしていくべきなのかを深く考えるきっかけにもなった。

・David氏が、ニュージーランドでは化石燃料の使用量を減らすよりも難しい、家畜に与える餌を変えることで、その呼気や糞から出る温室効果ガスの排出量を減少させようとする取り組みをしている、とおっしゃっていたのが特に印象に残った。私は、家畜から排出される温室効果ガスが問題になっているのは知っていたが、それに対する具体的な取り組みは聞いたことがなかったからだ。温室効果ガスの削減のための対策として、一般的に誰もがすぐに思いつくものといえば、化石燃料を使用するのをやめる、ということだと思う。しかし、この例のように常に新たな視点を持つことが必要なのだと感じた。



・David氏が紹介していた、”There is no planet B”という言葉が非常に印象に残っている。環境問題はいつか解決できたらいい、というものではなく、今、解決に向けて行動を起こさなければいけないものだ。私たちが生き、愛するこの地球は沢山ある地球のうちの一つではなく、唯一無二の惑星なのだ。その地球を守るために、政府がSDGsなどの大きな目標に向け政策に取り組んでいくとともに、私たち一人一人が自分にできることを行なっていかなければ

ならない。今まで私は、地球規模の問題に自分には関係ない、とどこか思っていた所があるが、今からでも意識を切り替えなければいけないと実感した。

・There is no planet B. という言葉が特に印象に残った。技術の発展が著しい今、「変わりがあるから」と考えてしまいがちだが、地球の話となるとそう簡単ではないことを改めて感じた。火星に移住するという話も出ているが、今の地球と同じような環境を作り出すには、膨大な労力が必要である。そうすると今の地球を守るために、社会が提示した目標に従うだけでなく、個人が何をすべきか、何ができるかを考えて行動することが求められていると思った。

➡ 7月9日「第2回グローバル委員会開催」

6月16日（水）に第1回グローバル委員会を開催し、今回は第2回目の開催となった。グローバル委員会は、生徒の立場でグローバル事業を盛り上げていく自主的な委員会である。グローバル事業に関わるさまざまな活動の準備、運営や広報活動など、自主的な活動を展開している。例えば、昨年はグローバル委員長がアポイントをとって農林水産省の職員の方を招聘し、講演会を開催した。第2回目の委員会では個々の生徒がグローバル委員会を通してどのような活動を実施したいか意見を出し合い、活動について検討した。



グローバル委員会は、いつでも、誰でも参加することができる委員会です。（クラスの委員や係と兼務可能です。）日比谷高校での生活を実りあるものにするために、ぜひ積極的にご参加ください！

➡ 7月13日「令和3年度高校生研究員プロジェクト」

東京大学先端科学技術研究センター小原特任准教授によるレクチャー

7月13日火曜日の放課後、東京大学先端科学技術研究センターの小原先生から、G10の2グループの研究内容に対して助言を頂いた。この企画は東京都教育委員会がDiverse Link Tokyo Edu事業として東京大学先端科学技術研究センターと協力して実施しているものです。

Aグループの研究テーマは「コロンビアにおけるコーヒー農園でのトマトへの部分的な転作」であり、Bグループの研究テーマは「南部鉄器の普及による鉄分欠乏の改善」であった。

Aグループの研究内容に対して、3点の助言を頂いた。1点目は、コーヒーに着目した動機をはっきりとさせることだ。研究テーマが私たちにとって身近な問題であるほど、その解決に向けて、情熱をもって真剣に取り組むことができる。なぜその研究テーマを選んだのか、確固とした動機と目的意識があることが、研究において重要であるのだ。2点目は、コーヒー農園の経営が不安定な理由を見つけることだ。Aグループは、コーヒー農園の農地の半分を、価格が変動しやすいコーヒーから価格が比較的安定しているトマトに転作することで、農園の経営の安定化を図ろうとしていた。しかし、コーヒーの価格が不安定な理由が自然災害にあった場合、コーヒーからトマトに転作しても、同様の問題が依然として残る。問題の解決策を提示するにあたって、その問題の根底にある原因を調べ、見極めることが必要なのである。3点目は、コーヒー栽培のサイクルを理解することである。農作物の栽培には気候に合わせたサイクルがあり、それを理解しなければ、転作に適した作物を見つけることができない。

Bグループの研究内容に対して、2点の助言を頂いた。1点目は、発展途上国の問題に対する解決策を考えるときに、先進国の視点から問題を見ていないか注意することだ。例えば、先進国では砂糖の取りすぎが問題になっており、砂糖の摂取は害になると思われている。その一方で、発展途上国で栄養失調に苦しんでいる人にとっては、砂糖は薬となる。研究を進めるに当たっては、研究テーマとして据えた問題を抱えている地域の現状を正しく理解し、現地の視点から問題に向き合うことが、その解決に必要なのである。2点目は、解決策として提示した事業を、誰が主体となって行うのかははっきりとさせることだ。主体となるのが企業であるのか、高校生の私たちであるのか、それを決めることで、提言内容の方向性も定まり、実現可能性も高まる。



2グループに共通して、2点の助言を頂いた。1点目は、研究テーマを決定する際に、小さな課題からさらに範囲を狭めた課題へと絞ることである。壮大な課題から、小さな課題へと範囲を狭めるのは、学者の方々をもってしても至難の業であるという。2点目は、多くの人が考える切り口とは異なる方向から研究テーマを設定することで、大勢の人が気付いていない重要な食料問題を解決することができる可能性があることだ。食事は全人類がする行為であり、全ての問題が食料問題に繋がるため、新鮮な切り口から研究テーマを設定することに対して、恐れる必要はないのである。

今回の研修を通して得た新たな視点を、各グループがそれぞれの提言内容に反映させ、より深く研究を進めたい。